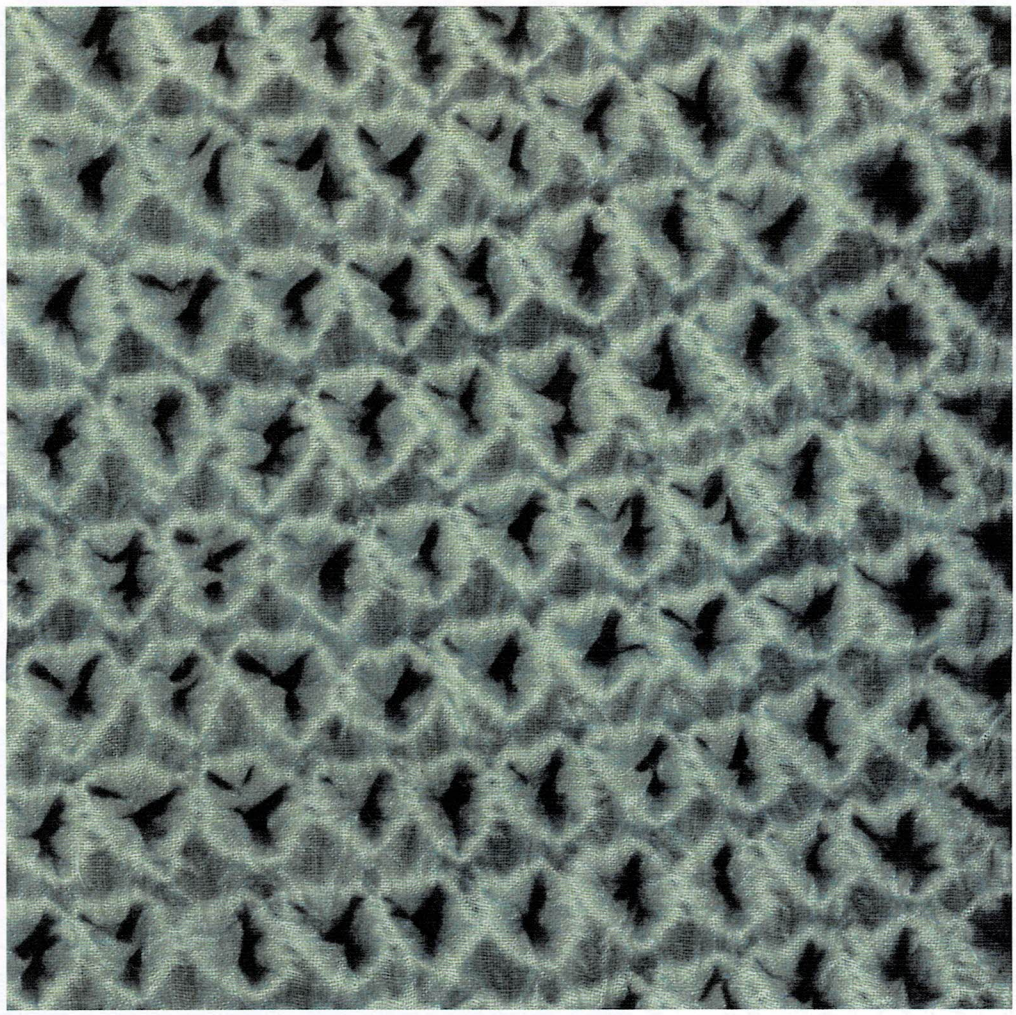
JAPAN HERITAGE
日本遺産

有松

NO.94 有松まちづくりの会



◇平三浦絞り

平三浦絞りは左から右へ横に絞っていくところから別名横三浦絞りとも言います。
下絵を付けず手先の勘で絞る技法なので、技術的には修得するのが難しい絞りの一つです。
一粒ずつ大きさが揃うのが基本になるので、最初は少し粒が大きくても、まず粒の大きさを揃えることから訓練する必要があります。絞る時もなるべく生地を手前の方に引っ張り、真横に絞れるように加減する必要があります。

解説：竹田 昌弘

日本遺産「認定継続」の報に寄せて

有松まちづくりの会　副会長　堀内 広実

令和元年度認定日本遺産総括評価・継続審査結果について、「認定継続」とのお報せを頂きました。名古屋市観光文化交流局歴史まちづくり推進課及び有松まちづくりの会会長中濵豊氏からお聞きしたのは、新年間近の十二月二十四日のことでした。

日本遺産に認定されてから六年間が経過し、令和七年度は「総括評価・継続審査」の対象となり、令和七年七月に審査経過が公表されて、「再審査」となりました。関係する行政機関、地域・個人等、広範に亘る方々のご奮闘やご支援を頂きまして、十二月に公表された最終結果において、有松は「認定継続」（令和七～九年度）となりました。

喜び、安堵とともに新たな緊張を強く身に感じているところです。

文化庁の再審査では、「有松の観光に関するデータ（数的資料）が少ない」「文化資源を観光に活かす取組が不十分」「有松地区からの情報発信の不足」などが主な課題として指摘されました。

中でも、日本遺産を活用した集客・活性化、日本遺産に関する取組を行うための持続可能な体制の維持・確立＝「計画目標の達成に対する評価」に対しては「目標を達成していない」との厳しい評価が与えられました。

これに対応する大きな修正の具体的な方策として、「有松日本遺産推進協議会」が設立されました（本年一月末）。

日本遺産の活用と保全を通して地域活性化を目指す組織です。地域・民間事業者・行政が協力し連携を深化させて、課題の解決に取り組みます。地域活性化のために行う事業は①組織整備②戦略立案③人材育成④整備⑤観光事業化⑥普及啓発⑦情報編集・発信など、多岐にわたります。

地域連携強化のための手立てには、意識の向上・情報共有の促進・役割分担の明確化・コミュニケーションの促進・継続的な取り組み・仲間づくりなどが挙げられます。これをどう具体化するのか、理念と理論に裏打ちされた実践が求められます。

重要伝統的建造物群保存地区として町並み保存運動に関わって来られた高い意識を持つ地域の経験と、若い世代の意識・活動を有機的に繋いで、有松の素晴らしい過去と現在を生かし、輝ける未来を見据える「足は大地に目は未来に」への研鑽が続きます。

<第1回全国町並みゼミ 有松・足助宣言>

有松・足助 宣言

日本の各地で歴史的町並みの保存運動を行なっている住民組織の連合体である「全国町並み保存連盟」と「全国歴史的風土保存連盟」は協力して、一九七八年四月二十二、二十三日、名古屋市有松町と愛知県足助町で第一回の「全国町並みゼミ」を開催した。地元の住民を中心に、全国から住民運動にたずさわっているもの、自治体関係者、専門家、研究者など五百人が参加した。その討議を通して私ども参加者はつぎの事項を確認した。

すなわち、歴史的町並みを中心とする歴史的環境の保存の問題は、いまや環境問題の焦点になってきたということである。それは地域の創造であり、町づくりである。さらにそれは、物的な整備にとどまるものではなく、新しい人間関係の確立であり、その中心は未来をになう子どもたちのためのすぐれた環境の創造である。

こうした地域の創造の主体は、住民であり、自治体であり、それに協力する専門家である。この三者が、それぞれの特性をいかしながら確かな協力関係を築きあげていくことである。

私どもは、きょうを出発点に、歴史的環境保存の運動の輪をさらに全国にひろげていくことを宣言する。

一九七八年四月二十三日
第一回「全国町並みゼミ」参加者一同

～先人の熱き思いを受け継ぎ、未来へ繋ぐ～

有松から始まった町並みゼミ 台北でアジアをつなぐ

全国町並み保存連盟　事務局長　山本 玲子

半世紀前に有松・足助から始まった「町並みゼミ」が日本を飛び出し、台湾の首都・台北市で開催されました。１９９２年にはじめて吉井大会に参加して以来、コロナ禍を除いて「町並みゼミ」に参加している「台連歴史資源経理学会」は、２０１９年に会員となり、２０２３年の小樽大会の基調講演で丘如華さんが「アジアの町並み保存のネットワーク」を提案したことから初の海外大会が実現したものです。

会期は10月31日(金)～11月2日(日)の3日間で、終了後に半日の4つの市内見学会と2泊3日の台中見学会が開催され、インドネシアやタイ、香港など10か国から３００名超が参加しました。メイン会場は日本統治時代(明治28～昭和20年)の酒造工場群をリノベーションした「華山１９１４文化創意産業園区」の元樟脳倉庫で、このような日本統治時代の産業遺産は台湾全土で保存活用が進み、今回の第3分科会のテーマでした。他の3つの分科会は、容積率移転で町並み保存を進めている迪化街・大稲埕、中心部の旧台北城内、国の町並み保存地区のある城南地区を会場とし、午前中見学、午後は議論というスタイルはいつもの「町並みゼミ」と同じです。日本語、中国語、英語の通訳が用意され、私たちは何のストレスもなく参加することができました。そしてそこで活躍したのは学生ボランティア、逢甲大学と暖暖高校が事前学習を重ね、当日加わった横浜市立大学とたった一晩で見学会の模様を映像にして議論を整理した「分科会報告」はたいへん好評でした。

丘さんと「日本から80名くらいは参加してもらいたい」と話をしていたところ、結局直前までお問い合わせが続き、日本から１３０名超が参加、台湾の方のお申し込みを断らなくてはならなくなりました。そしてこの年末年始、参加者による報告会が各地で続いていて、台湾で学んださまざまな保存活用の事例をどう地元につないでいくかが今後の課題です。

今年の全国町並みゼミは、12月12日(土)～14日(月)に三重県松阪市で開催されます。今回も過去の町並みゼミの歴史をふまえ、松阪らしいテーマを検討されています。みなさんの参加をお待ちしています。

※台湾歴史資源経理学会のフェイスブックで写真・動画が見られます。まとめの動画は12月4日の投稿をご覧ください。

開会式

日本遺産 有松を訪れて

豊田市立足助小学校

令和八年一月二十日、全校で有松の町並みを訪れました。当日は、町並み散策ボランティア有松あないびとの会の皆さまや、子どもたちの安全を見守ってくださる地域の方々が、温かく出迎えてくださいました。

足助地区もまた、二〇一一年に重要伝統的建造物群保存地区に選定された町です。江戸時代から明治時代にかけて建てられた建物が多く残る、歴史的景観が保存された地区です。また、全国的にも有名な紅葉の名所　香嵐渓を有している地区でもあります。今回の訪問では、有松と足助、それぞれの町並みの共通点や違いを見つけながら、子どもたちは歴史や文化への理解を深めていきました。さらに、有松小学校五年生のご協力で交流会も実現しました。

足助小
キャラクター
あすまるくん

有松絞体験では、世界に一つだけの手拭づくりに挑戦しました。折り方に苦戦しながらも、染め上がった作品を手にした子どもたちの目は、喜びと達成感で輝いていました。「色の付け方で無限のデザインができる」「有松の人たちが有松絞りを大切にしていることが伝わってきた」という感想も聞かれ、伝統工芸の奥深さにふれる貴重な時間となりました。

町並み散策では、どちらの町も祭りを大切にしていることが分かりました。足助の祭りが大好きな子どもたちは、有松の祭りも見てみたいと感じたようです。歴史的な町並みの背後に、大きなショッピングモールがあることも、子どもたちには新鮮な景色でした。有松の山車に乗るからくり人形や火災から町を守る漆喰やなまこ壁など、足助との共通点や違いに気付く子も多く、地域の歴史を肌で感じる学びの場となりました。

最後に行われた有松小学校との交流会では、「怪獣のバラード」の替え歌にのせた町並み紹介に、子どもたちは大きな刺激を受けました。また、写真を交えた町の紹介もあり、有松の魅力が伝わってきました。発表を通して、子どもたちは、有松の人たちも昔から工夫して町を守ってきたこと、日本遺産である町を誇りに思っていることなど、有松の歴史や文化への理解を深めることができました。全校六五名の足助小学校では味わえない、有松小学校の子どもたちの歌声とパワーに圧倒され、心に残る交流となりました。

このような出会いと学びの機会を通して、子どもたちは地域の文化や伝統の大切さを改めて感じたようです。有松・鳴海絞会館、有松あないびとの会、有松小学校の皆さま、温かいご協力を本当にありがとうございました。ぜひ、足助地区にも遊びに来てください。

「有松と足助のつながり」

『「第一回全国町並みゼミのこと」

昭和48年に有松まちづくりの会が発足し、石川さんが町並み保存に熱心な木曽の妻籠、奈良の今井町の方にも声をかけ、昭和53年に有松で第1回全国町並みゼミを行うこととなりました。会議は有松小学校で行いましたが、有松には宿泊施設がなかったので、宿泊と宴会は足助でやりました。足助までは有松の若い人たちが送迎をしました。当時、有松には商工会と絞組合、消防団くらいしか組織がなかったため、絞組合の役員がそのまま有松まちづくりの会の役員にも名を連ねていました。町並みゼミには、有松の町屋を調査していただいた東京工大の稲垣先生、名工大の城戸先生の他に、当時の本山市長も参加し、旧東海道を西の端から歩いて町並みを見ていただきました。石川さんが考えた「町並みはみんなのもの」という町並み保存ゼミのキャッチフレーズを受けた、本山市長の「町並みを残すのはみなさんだ」という言葉を覚えています。平成28年山田峯夫「有松HISTORY～有松の語り部に聞く」から(抜粋)』

この時の全国町並み保存連盟の会長は服部孫兵衛さん、事務局長が先代の竹田嘉兵衛さんでした。石川さんとは、朝日新聞の記者で、名古屋に赴任したときに有松の町並みに感動して、保存運動を働きかけた石川忠臣さんです。

今年の1月20日、足助小学校の全校児童64名が、有松を訪れ、絞り体験をし、町並みを見て回りました。私も有松あないびとの会の一員としてご案内しました。昼食後には有松小学校の児童と交流会がありました。有松と足助の深いつながりを思い出した次第です。

豊田市の公式観光サイトでは次のように紹介しています。

『愛知県で初めての国の重要伝統的建造物群保存地区(通称：重伝建)に選定された「足助の町並み」。尾張・三河から信州を結ぶ伊那街道(中馬街道)の重要な中継地にあたり、物資運搬や庶民通行の要所として栄えた商家町です。重要な交易物であった塩はここで詰め替えられ、「足助塩」「足助直し」と呼ばれました。安永4年(一七七五)の大火で町並みの大部分は焼失。今に残るのは、防火のために漆喰で軒先まで塗り固めた塗籠造りの町家です。江戸時代後期から明治末までの面影を今に伝えています。』

有松町は昭和39年に名古屋市に合併していますが、足助町はその後、平成17年に豊田市に合併しています。有松は昭和48年に有松まちづくりの会を発足しますが、足助の町並みを守る会は昭和50年です。

有松と足助は、よく似た兄弟のような町であることが分かります。このご縁で、第一回全国町並みゼミは、昭和53年4月、有松と足助で開催されました。その頃昭和52年の足助小の児童数は二六九名でした。しかも、その後、御内、大見、椿立の各小学校を統合しているのです。

現在、三河山間部の多くの地域がそうであるように、足助も人口減少と高齢化が進行しています。これに備えて、足助町は昭和55年に、「三州足助屋敷」を作ります。これは、足助の暮らし、伝統的な技術を、観光客に紹介する文化観光の拠点となると共に、これらを保存、伝承するばかりでなく、高齢者の働き場所を確保することになりました。

平成2年には「百年草」という観光と福祉の複合拠点を用意しました。命名には「誰もが雑草のように百歳まで生きよう」との願いが込められたといいます。

アユ釣りの名所の足助川に面したホテルにはフレンチレストランがあり、豊田市社会福祉協議会が運営する介護事業所「百年草デイサービスセンター」が共存する。介護保険のケアプランを作る「居宅介護支援事業所」や、訪問介護を行う「ヘルパーステーション」、じいじ(爺)がハムやベーコンをつくる「ZiZi(じじ)工房」、ばあば(婆)がパンを焼く「バーバラはうす」も隣接します。60人以上いるスタッフの半数が60代、70代だといいます。

合併前から、将来を見据えた様々な施策を用意した足助が、これからどうなっていくのか、訪問して応援したいと思います。

(山本文雄)

1962	昭和37	マルロー法〔仏〕
1964	昭和39	有松町が名古屋市と合併、緑区に編入される
1966	昭和41	古都保存法（歴史的風土保存特別措置法）
1967	昭和42	シヴィック・アメニティーズ法〔英〕
1968	昭和43	妻籠を愛する会発足
1971	昭和46	今井町を保存する会発足
1973	昭和48	有松まちづくりの会発足
1973	昭和48	第1回妻籠・有松・今井合同町並み保存協議会
1974	昭和49	町並み保存連盟結成（妻籠・有松・今井）
1975	昭和50	全国町並み保存連盟に改称（富田林・奈良井が加入して）
		足助の町並みを守る会発足
		重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）制度創設
1976	昭和51	7地区が重伝建地区に選定
		（角館・妻籠・白川郷・産寧坂・祇園新橋・堀内・平安古）
1978	昭和53	第1回全国町並みゼミ（有松・足助）
2005	平成17	足助町が豊田市と合併
2008	平成20	歴史まちづくり法
		（地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律）
2011	平成23	足助が重伝建地区に選定
2016	平成28	有松が重伝建地区に選定（111番目）
2017	平成29	第40回全国町並みゼミ　名古屋有松大会
2019	令和元	有松が日本遺産に認定

有松史料調査保存会 第5回発表会を終えて

本発表会も今年で5回目となりました。3月12日(木)～15日(日)の4日間、棚橋家住宅にて開催しました。総来場者数は493名(前年436名)で、好天に恵まれ、大いに賑わいました。

主な展示内容は、有松の古い写真及び地図(少しずつ変わりゆく有松のまち、有松区画整理事業の様子等)、世界大戦当時の有松の様子、昭和時代の有松絞りの見本帳、浮世絵に見る有松と絞り等です。

今回の特別編は91年前の有松を紹介した映像の公開です。この映像は平成2年11月15日に有松まちづくりの会が「絞り染(原題:tie-dyeing)」の16ミリ映写会を開催した記録が「会報有松21号」に記載されています。これはまだ映画を活動写真と云っていた頃に、瀬戸市の映像作家・加藤雅巳氏の昭和10年の作品で世界グランプリ3位を受賞しました。この度、瀬戸市博物館のご協力により開催が実現しました。

映写会の光景

もうひとつの目玉展示は、昭和15年から18年にかけて発刊された「有松たより」です。全15巻のうち7巻を展示しました。当時の有松の様子が詳細に描かれており、1巻約50～70ページには日本国の奮起を激励する文章から俳句などの日常生活まで様々な内容が描かれています。7代目竹田嘉兵衛氏の自費出版で、有松から戦争に出征されていた兵士達に慰問袋に入れて食料品、日用品、お守りなどと一緒に同封されており、遠い戦地にいる兵士達の心の支えになったことが思い浮かばれます。残念ながら原本は古くて破損しやすいため表紙のみの展示でした。

令和7年は戦後80年を記念する年で、戦争当時のことを覚えている方も有松に数少なくなっています。今回は棚橋恭子氏にお話を伺い、動画として記録に残しました。小学校低学年だった棚橋氏は当時のことをかなり鮮明に覚えており、自宅の裏に防空壕があったこと、有松が空爆を受けて小学校や自宅の窓ガラスが大破したこと、天満社の山の木々が全て燃料のために切り出されて丸坊主になったことなどのお話を伺うことができました。近年、世界のあちこちで紛争が起きていますが、今一度、戦争のことを振り返り、将来にわたり平和な世界を実現するために、後世に伝えていくことの大切さを学びました。

賑わう会場の光景

有松たより

有松の古い写真コーナーでは昭和30年頃の有松東海道の家々の様子とその変遷、昭和7年の手越川大水害の様子等を展示しました。また現在の有松の基盤となった平成2年からの区画整理事業の様子もパネルで紹介しました。有松の住民の方々はそれらのパネルの前に釘付けになって思い出話に花が咲いていました。

有松は絞りで成り立ち賑わった町であり、昭和初期の絞商は大いに繁栄していました。大正時代の愛知電気鉄道有松線の開通(大正6年)や新技法の開発もあり、有松絞生産高は順調に推移していました。当時の絞商は商品販売のために主に全国の百貨店や呉服を対象とした展示会などを積極的に開催しており、今回はその展示会などで使用した絞生地の見本帳を展示しました。

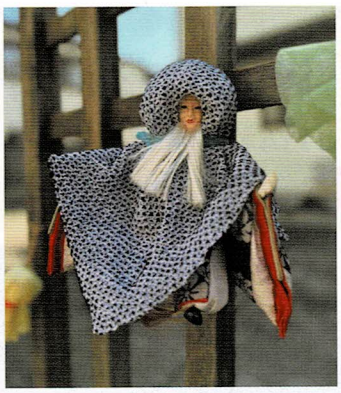
江戸時代に発達した浮世絵は色彩豊かな風俗画で前時代の武将を描いた「武将絵」や遊女の美女を描いた「美人画」、歌舞伎役者を描いた「役者絵」、風景を描いた「風景画」などがあります。江戸時代にはマスメディアの役割も果たした浮世絵版画は、商品を宣伝する媒体としても活用されました。有松の絞店が発注した宣伝チラシも存在します。また歌川広重の「東海道五十三次」には旅人や町衆が着用する絞り染めの浴衣が数多く描かれて、当時の風俗を伝えています。有松絞りは特に有名で、浮世絵に描かれることで全国的に有名になっていきました。

有松史料調査保存会の活動は、有松が日本遺産に認定された令和元年の10月に立ち上がりました。当初はコロナ禍で思うような活動ができませんでしたが、年数を積み重ねる毎に貴重な史料の収集も多くなりました。令和7年12月に有松が日本遺産として再認定されたことにより、より一層の活動の励みになっています。

(根尾文彦)

春のありまつさんぽみち
福よせ雛と町歩き 2026開催
（2月21日～3月22日）

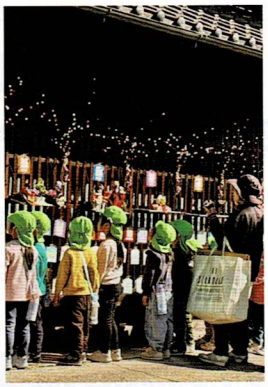
今年で11回目の有松の福よせ雛事業、雛は700体、ぬり絵と川柳は800枚ほど展示しました。どうぞ誌上さんぽをお楽しみください。



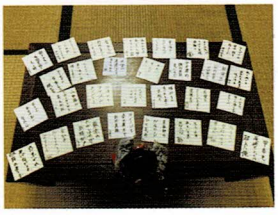
屋外に飾ってある福よせ雛は雨が降ってもそのままです。「雨に濡れて可哀想ね」とご心配くださるお客様がいらっしゃるので工夫して、絞り布を使って“てるてる坊主”のようなレインコートを着せてみたら、何と愛らしい❤おじいちゃん雛のお髭が強調されて、今回の映えスポットになりました。

今年初参加、至学館大学の学生さんに台飾りを制作していただきました。レスリングなど体育会系として有名な大学だけに、雛もこの通り！バレーボールのネットに三浦絞りの布を使うとは、大学生の発想って面白い。

近隣の幼稚園・保育園の皆さんは「福よせぬり絵」を制作して参加してくださっています。福よせ雛やぬり絵を熱心に見入る園児さんたちの姿は本当にかわいらしくてほっこり。自分のぬり絵は見つけられたかな？



毎年見る人を??の気分にさせる大学生さんのつぶやき川柳。東海道つながりの各地から寄せられた大人川柳や小学生さんの素直な川柳もあり、ついつい立ち止まってしまうお客様は笑ったり考えたりされています。



福よせ雛の活動を通して、寄付して頂いた様々な時代の雛を見て触っているからこそ気付く事は沢山あります。「昔の雛は重いなぁ」「昔の五人囃子はこんな髪型してたのね」「昔の雛は目が切れ長美人だな」など。令和の雛はパッチリおめめで時代の流行りを感じます。

節句人形として役目を終えた雛が福よせ雛となり有松の町に飾られて、皆様に楽しんで頂くためのお手伝いをさせて頂ける事に私は感謝しています。

（六鹿晴美）

街角ウォッチング ㉙
～秋葉さんと台所の魔女～

有松の町は秋葉さん信仰が熱心で5か所に祠がありました。現在は4か所です。

1784年に村のほとんどが消失する大火を経験した後、当時の江戸の最新の防火建築を取り入れた豪壮な家並みが生まれたのです。そして秋葉さん信仰も盛んになったと思います。現在は12月に祇園寺で祭礼が行われています。岡家の釜場にも祀ってあります。

先日外国の人が通訳を伴い岡家見学に来られました。いつものように浮世絵や湯のしの話をした後、釜場で江戸の大火と秋葉さんの話をしました。火の守り神であることを説明すると、自分の国でも「台所の魔女」があると教えてくださいました。

この魔女人形は、やはりホーキを持って長い鼻のスタイル。ちょっと怖いイメージも有りますが、厄除けパワーを持っていて頼もしい存在。家内安全、台所の見張り役で火の守り神。壁に吊るしたりして魔よけとする習慣があるということです。日々の平穏を願う気持ちは皆同じですね。

「キッチンウイッチ」と言って色々なデザインの魔女人形があり、日本でも売っている店があるそうです。見つけたら是非買いたいものです。

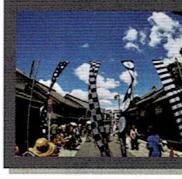
（浅野康子）

有松まちづくりの会総会

◆日時　5月15日(金) 13時30分より
◆場所　有松鳴海絞会館

第42回有松絞りまつり

◆6月6日(土)・7日(日)
―テーマ―
「いいじゃん！有松」



鯉活プロジェクト
有松絞り鯉のぼり展示

4月中旬～5月上旬

有松・絞りの鯉のぼりが泳ぐ2　　切り絵　豊田信行

俳句

「有松界隈」　諏訪部草童

街道に並びし雛妍(けん)競ふ
天満社足裏(あうら)に柔(やわ)し春の土
有松の冬中四友(とうちゅうしゆう)探す杖

有松あないびとの会
無料町並みツアー実施中

日時　毎月第1日曜日 13:00出発
受付　岡家住宅　※先着8名様

有松あないびとの会

あないびとと
ご一緒に
有松の町並みを
歩きましょう

◆主な来訪者◆（あないびとの会ご案内分）

- JR東日本「大人の休日倶楽部ジパング」
- 旅人企画「東海道五拾三次を歩く」
- 名南東歴史クラブ
- ワールド航空サービス
- 岐阜県教職員互助会本巣支部
- 全日本年金者組合
- 青山きもの学院
- 信州名匠会
- 新居宿史跡案内人の会
- 扶桑町文化協会
- シニアクラブ田原
- 民族衣裳文化普及協会
- 東生涯学習センター
- 福井県人会
- 東海トラベル墨心会
- クラブツーリズム
- こまき市民文化協会
- 岐阜県文化財保護協会
- 福よせ雛お散歩会
- sonoligo

編集後記

昨年の暮れに文化庁から届いた嬉しい知らせ。「日本遺産認定継続」の報は有松の皆を元気にしました。一層知恵を絞って有松の素敵を日本中に、世界に届けるために頑張るだけです。先進地に学ぼうと企画された2月の勉強会、岐阜の蒲さんの講演も大いに参考にして、有松地域の魅力や魅力的な人をどんどん披露して「有松推し」の輪を広げましょう。足助小学校の皆さんの来訪は、第1回全国町並みゼミでの連携を見つめ直させてくれました。その時のテーマは「町並みはみんなのもの」でした。ずっとみんなで繋いできた有松のまち。いまこそ第40回ゼミのように「私が守る」と踏み出しましょう。　（加藤明美）

企画編集（加藤一成・福岡友一・伊藤総俊・中村昭子）

◆有松まちづくりの会はホームページを公開しています。「有松のまち」で検索

〈有松まちづくり憲章〉

私達は、先人から受け継いだ有松のたからものを守り、次世代に届けるために、この憲章を定めます。

一、有松の町並み・絞り・山車を守り、誇ります。
一、人と人とがつながり、ぬくもりのある有松を創ります。
一、有松の歴史や物語を学び、遊び、伝えます。

有松まちづくりの会
二〇二六年三月三十一日発行
（年二回発行）
〒458-0924
名古屋市緑区有松三〇一二（有松商工会内）
TEL（052）621-0178
FAX（052）622-7401